The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜文献紹介＞シルヴァン・フランコット著『ベルクソン：持続と道徳』Sylvain Francotte “Bergson : Durée et morale” Academia Bruylant, 2004
Author(s)	田中, 悠介
Citation	メタフュシカ. 2010, 41, p. 81-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4326
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

《文献紹介》

シルヴァン・フランコット著

『ベルクソン：持続と道徳』

Sylvain Francotte *"Bergson: Durée et morale"* Academia Bruylant, 2004

田中悠介

著者のフランコット[1]によれば、この著作の最終的な目標は、一つは「ベルクソンの道徳論において持続がどのような重要な役割を担うか」（p.18）ということであり、もう一つは現代の議論のうちで、「持続の概念を媒介として科学と道徳を関係づける」（p.12）ことである。そのために、本書では持続の機能・役割に焦点を当てた議論が要請されている。

著者は、持続の概念を精査するにあたり、現代の自然科学、脳神経科学、認知科学に対する考慮も必要だと考えている。それらからの批判をくぐり抜けて初めて、持続を中心とした形而上学や道徳論を研究する意味が生まれる。その点から言えば、本書は一貫して持続に関わる議論を集約したものと読まれるべきである。

フランコットの研究は科学と哲学の関係と伝統的な哲学史にまたがるものである。本書は『道徳と宗教の二源泉』[2]（以下、『二源泉』）における道徳論と持続との関係を定義するため、前段階として、科学からの批判の綿密な検討を行う点に特徴がある。

本著作は全体で 3 部 6 章の構成をとる。章の順序に従いフランコットの主張を考察し、最初に立てられた問題が大きく扱われる第 1 章、2 章、6 章を中心として本書を紹介する。

1 部　ベルクソンと科学

　1 章　ベルクソンと物理学者

　2 章　ベルクソンと脳科学

2 部　ベルクソンにおける持続の概念

　3 章　持続の概念

1　Sylvain Francotte は神学の学士、ルーヴァン・カトリック大学で哲学博士号を得ている

2　Henri Bergson. *Les deux sources de la morale et de la religion,* 1932

4 章　直観の概念と創造の概念

3 部　ベルクソンの道徳概念

5 章　道徳の諸学説：快楽主義と幸福主義

6 章　引受 assomption の道徳と自己成就 auto-accomplissement の道徳

本書の第 1 部においては、物理学と脳神経学からの批判に対してどのように答えるべきか、ということが課題とされる。フランコットの答えは、持続の概念こそがベルクソンに物理学者から離れた見解をとらせる要因であり、持続の概念の受容の仕方が批判者のベルクソン理解を誤らせている、というものである。

1 章においては物理学からの批判、特に『持続と同時性』[3]における相対性理論、ローレンツ式の理解に関する批判が検討される。

著者が例示している「砲弾の中の旅行者 Voyage en boulet」[4]の議論において、ベルクソンにとっては、真に生きられた（経験された）時間が同一でありながら、物理学者の想定する仮想的な時計が異なった時刻を示すことはありうる。その場合、物理学者にとっては同じ時間経験でありながら、異なった時間を経る、という矛盾した結果を生むように見えるが、ベルクソンは矛盾は実在の時間と仮想の時間の混同によるものであり、現実には唯一の時間において両者は同一の持続の経験を生きていると考える。このことがアインシュタインの理論からベルクソンが導く、時間に関する帰結である。この章でフランコットが批判者たちから引き出してくる共通の論点は、物理学者から見れば、ベルクソンは相対性理論やローレンツ式[5]をゆがめて理解しており、なおかつ、不正確な仕方で語ってしまっている、ということである。それらの理論は、想像力の空疎な構築物ではなく、実験に裏付けされた経験的な妥当性を備えたものである、というのが物理学の見解なのである。そこから、ベルクソンが自分の思想をそれと知らずに反映させているために、正確に理論を解することができなかったとの反論がなされる。ソーカル–ブリクモンの批判[6]も、ベルクソンの思考が実際には理論を導く経験（実験の結果）に衝突するという考えに基づいているのである。

一方で、ハイドシェックといった物理学者は、一定の範囲で相対性理論をベルクソン的に解釈することが可能であると考えている。彼によれば、ベルクソンの誤りは言葉の用法の違いを無視して、哲学的な考察を持ち込み、その上で批判している、ということに尽きる。彼はベルクソンが哲学における「実在の réel」と「虚構の fictif」という語の差異を、現実的な結果という尺度でしか思考しない物理学の領域に当てはめていると批判する。ここでは、ベルクソンと批判者の間

3　Henri Bergson. *Durée et simultanéité,* 1922

4　『持続と同時性』から例を引くと、弾丸の中にいる旅行者と地球の観察者の関係では、地球の観察者が 200 年を計測する間に旅行者は 2 年の時間経験しかもたない。

5　問題として現れるのはローレンツ式による慣性系の変換可能性が時間の無理な拡大（多様な時間）につながることである

6　Alan Sokal, Jean Bricmont. *Intellectual impostures,* Odile Jacob, Paris, 1996

で、議論の土台が共有されていないことが問題とされている。それでも、ハイドシェックは、生きられた唯一の時間というベルクソン的概念それ自身は、実質的に相対性理論との両立が可能なものとして考えている。

フランコットは、ベルクソンの考えを批判する物理学者と、ある程度肯定する物理学者のうちに、持続に対する理解の差を見出す。ベルクソンの議論の否定は、持続という、生きられた時間の概念や等質性・空間化批判、あるいは実在および計測という概念（言葉遣い）の実質を批判者の側が考慮していないために起こることである。例えば、経験される、ということはベルクソンにとっては実在の観察者の内面的な生についての記述であって、実験の結果として理論上の確証が得られるということとは違う。つまり、ベルクソンの使う概念と、批判者の考える概念が異なるために議論がかみ合っていないだけで、ベルクソンの持ち出す概念は正確に理解されれば、物理学と両立しうると著者は考える。

さらに、フランコットは物理学の発展によりベルクソンの概念が裏打ちされるとさえ考える。論拠として、波動力学において、素粒子の正確な運動状態と空間中での明確な位置が同時に決定されないことをド・ブロイがベルクソンの著作のうちに読み取っている点を挙げる。著者は、不確定性の理由を現在が過去よりも根本的に豊か riche であるためだ、と考える点において、ド・ブロイの示す波動力学の図式とベルクソンの時間概念との重なり合いを認める。同様に、現代の熱力学における時間の不可逆性の議論（熱力学の第二法則による）と不可逆的に進展するという持続の性質が重なることを導く。

ベルクソンにとっての主要な問題は、アインシュタインの時間と彼自身の持続の概念がどのようにすれば両立できるのか、ということであった。この点に関して、著者は『持続と同時性』におけるベルクソンの記述それ自体は説得的なものであり、物理学からの批判は持続の概念の不十分な理解がもたらすものと考えている。実在の、生きられた時間の概念を受け入れれば、ベルクソンの持続概念と相対性理論の時間概念は十分に両立しうると主張される。同時に、現代の物理学（量子物理学）の時間の捉え方のうちにベルクソンの持続の概念との一致を見出すことさえ出来るのである。

2 章では脳神経学、認知科学の分野からの批判が扱われる。批判は大きく三つに分かれる。第一にベルクソンの『物質と記憶』[7]における理論がこれらの分野における最近の研究と矛盾しているという批判。第二の批判はベルクソンの議論が時代遅れなものであり、より精細な説明の登場で、その意義は失われる、というものである。そして第三の点は精神の哲学は科学から分離されるべきという批判である。

第一の点に関しては、失認症、失語症のケースが問題とされ、運動図式の混乱によって失認症がもたらされるというテーゼが脳神経学の立場から否定される。それは同時に、ベルクソンの大脳局在説の批判（記憶は脳に貯蔵されるものではないという批判）が問題となることも示している。ベルクソンは、失語症は記憶そのものではなく、それを呼び出す運動図式の損傷が原因と考

---

7 Henri Bergson. *Matière et Mémoire,* 1896

えていた。現代の脳科学の知見では、その原因は大脳皮質の損傷（記憶機能そのものの障害）で置き換えられる。ミサ[8]は症例における脳状態の観察や脳機能に関する現代の知見からはベルクソンの主要なテーゼが信頼できないものである、と結論している。ここで、フランコットはいくつかの点で、ベルクソンの不正確さを認める。すなわち、著者はベルクソンの理論のうちで、大脳局在説批判とそれに伴う脳機能の定義は時代に依拠した知識（の欠如）に基づく不十分さを免れてはいないと考える。それでも、著者はベルクソンの理論が彼の時代の脳科学の実験結果に対して正当な配慮と整合性を示し、その点で批判は時代の知的背景を考慮になされるべきである、と言う。

第二点に関しては、身体による再認の議論と、記憶の二つの形態（習慣的記憶と純粋記憶）の議論が現代の認知理論の一端を担っている、ということが示される。著者は脳神経学・認知科学の議論がベルクソンの知見をより正確で具体性を持った理論で塗り替えていくとしても、ベルクソンの理論はその基礎としての意義を失っていないと考える。

結果的に、フランコットは時代的な知識の制約があると判定しながらも、『物質と記憶』の理論は、なお多くのデータによって証拠付けられたもので、そのテーゼのいくつかは現代の脳神経学ともいまだ整合性を持ち、その核心において、なおも重要性を減じないと述べる。同時に哲学・形而上学的な二元論の問題は実験室での結果のみでは反論されえないものであり、そのために、現在でもベルクソンの理論は科学的、哲学的、両面で参照に値すると主張される。

とはいえ、このような応答でいくつかの批判をかわせるとしても、個別的に見れば、脳は表象を生み出さないというベルクソンのテーゼに対する批判（外部的要因のない状態の脳活動において、脳が表象も持つことがありうることから、脳が知覚なしで表象を生産できるという帰結からの批判）を、著者はもっと深刻に受け止めるべきではないか。知覚のシステムの基礎としてイマージュ論がある以上、脳が独立して表象を生産することをもし著者が認めるならば、それを踏まえた上での、知覚や記憶についての理論全体の再構成が必要とされるだろう。この点への配慮の薄さは、著者にとって持続に関わる概念、すなわち経験におけるベルクソン的な知覚と記憶の概念が守られることが必要なのであって、理論上で記憶が脳に局在するかどうかは、ベルクソン哲学の本質的な部分ではないと考えていることを示している。その限りで、現代的な脳神経学、認知科学の議論はベルクソンの哲学の核心を侵犯するものではないと捉えられているのである。

第三の点で問題となるのは、精神の哲学 philosophie de l' esprit と科学の分離である。脳神経学者はベルクソンが脳神経学に関する考察を彼の哲学に還元し、経験や科学的知見を哲学的な観点から眺めているだけだと批判して、科学をベルクソンの思想から引き離すことを望む。同時に、彼らは精神の哲学が恣意的に脳科学の知見を使用することへの批判や、科学的な思考が認識論や形而上学によって制限されるべきではない、という主張を行う。著者によれば、ミサはベルクソンの哲学は明白にスピリチュアリスムであり、事実（実験結果）を、事実そのものを踏み越えた哲学的システムへと統合しようとしているのならば、それは脳神経学の成果からは排除されるべ

---

8 Missa, *L'esprit-Cerveau,* Vrin, Paris, 1993

きだと考えているのである。

この批判に対して、フランコットはベルクソンが当初から脳科学と精神の哲学の結びつきを前提して思考しているわけではない、と反論する。『物質と記憶』の序文において明示的に表されているように、正当に観察の地平から結果として脳神経学と精神の哲学に実在的な関係が見出されているのである。

著者は 2 章の終わりに科学と哲学の結節点として持続の直観を挙げる。ベルクソンの議論において、持続の直観は現実には、科学と哲学を分かつものであることが、ベルクソン自身が理想化して語ったような科学と哲学（持続と直観の方法論を中心とした）の接合を現代科学の成果の内に読み込むことで、著者は実証科学とベルクソンの哲学は経験の観察において、持続の概念とそれを捉える直観の観点からつながりを持つと主張する。

3 章においては持続の定義と直観の考察が行われている。持続と直観の記述はベルクソンのテクストに内在的な解釈がなされている。ここで、持続は数的な多数性を含まない、異質なものの相互浸透と定義される。それは意識と結びついた、不可分な全体として捉えられたメロディーに見られるような、一つの流れとして捉えられた運動である。そして、実在の持続は我々の意識に現れる、並置されるものとは異なる時間の継起である。実在の持続は運動そのものであり、われわれにとって変化そのものでもある。フランコットは次に、持続と記憶および進化との関係を論じている。記憶と結びついた意識の流れのうちに持続は見出される。現在のうちへ入り込み、共存する記憶の全体が持続を構成する。持続は直接的に経験から理解されるものであり、それは記憶を背景に持つ。持続は記憶の延長の先端であり、現在の知覚のうちにも過去の記憶が影響している。「過去−現在 passé-présent が持続を構成する」（p.134）のである。また、著者は、進化と持続の関係をベルクソンのテクスト上から、持続のうちに進化の契機（エラン・ヴィタル）が含まれ、見出されるものと考える。

4 章では直観と創造の概念が扱われる。まず持続を見出す方法としての直観と他の認識手段との違いに焦点が当てられる。持続の発見は方法としての直観と深く結びついており、直観は持続を把握する方法として機能するのである。創造の概念については、ベルクソンは神秘主義からの影響を隠さず、神秘主義を生命進化の解釈に結びつけたところに創造の概念が見出されると著者は考えている（著者の視点は完全に『二源泉』のそれである）。フランコットの定義するところでは、創造は持続のうちに見出され、持続そのものの先端において、予見できない、新たなものとして生成する作用とされる。そして、その作用が道徳を引き上げる原動力となるのである。

5 章では、6 章への導入として、『二源泉』の記述をなぞる形で快楽主義と幸福主義をはじめとする既存の道徳学説が自然に依存し、特定の社会にしか適用されない相対的なものであることへの批判がなされる。

6 章において、ベルクソン自身の道徳の概要とそのための諸概念、すなわち社会のモデル、禁止と社会の強制力、個人の社会への適応と離脱に関わる諸力、道徳による禁止の働き、そして正義の概念と宗教の分析がなされる。その後、著者は閉じたものから開いたものへの進展、相対的な正義から絶対的な正義、静的宗教から動的宗教への飛躍について考察を進める。

フランコットにとって重要なのは、「不完全な神秘主義から完全な神秘主義への進展」（p.210）である。神秘主義の間の差異は現実にはキリスト教の神秘家による努力（創造）および愛の有無に集約される。その場面で、持続が重要な役割をはたす。すなわち、不完全な神秘主義と完全なそれを分かつのはエラン（はずみ・飛躍）の存在であって、エランをそのうちに含みもつような持続の活動性（持続の特質が成就する可能性）が二つの神秘主義の違いを示すことになるのである。これは静的宗教から動的宗教に、あるいは閉じられた社会から開かれた社会への移行に対応している。逆に辿れば、二つの形態の差異を示す絶対的正義、愛、創造、生の飛躍といった概念が持続を基礎としているのである。つまり、著者の主張は、それらの概念が神秘主義者の特権的な持続から、社会の諸個体の持続の実現へ展開するために必要となる、という点に存する。

フランコットは完全な神秘主義により実現される道徳を、持続が個の本質を展開し、個の持続が真の意味で展開・成就することを意味するものとして捉えている。そのような道徳は個体・持続の側から特徴付けられ、「エゴイズムから他者、あるいはそれ以上の、間主観性へ移行する」（p.217）道徳である。すなわち、神秘主義者の持続の展開とそれに導かれ・触発される諸個体の持続の実現が可能となる社会こそがベルクソン的な道徳（自己成就の道徳）を備えている、という主張だと理解することができる。

本書は全体としてみれば、第 1 部は科学、脳神経学といった現代の議論における批判に対する回答、第 2 部はベルクソンの持続を始めとした中心的な概念の定義付け、第 3 部は著者によるベルクソンの道徳論の解釈となっている。最初に示された目的のうち、現代科学の議論の中で持続の意味を定めること、およびベルクソンの道徳のうちで持続がどのような役割を果すか、という点については一定の答えが与えられている。ただし、持続の概念が媒介となり、科学と道徳のつながりが見出されるという点、つまり第 1 部と第 3 部の直接的なつながり、また、そのことで何が可能になるのかという点については不明瞭である。フランコットの主張は、持続の概念が科学と脳神経学の批判に耐えうるということが認められて初めて、ベルクソンの道徳論に意義がある、というものであり、同時に、現代的な科学と道徳は、持続を結節点として持つ、というものだ。著者は科学においても、道徳においても、発展の契機が持続の概念の導入であると考えている。しかし、本書においては、両者の内での持続の持つ意味は異なる。ここで、ベルクソンの道徳論に関しては主な概念が持続と関係付けられ、その道徳が持続から構築されていると言える。これに対して、諸科学との関係では、その成果とベルクソンの持続が矛盾しないことを示すことが主眼で、少なくとも、科学が持続を基礎に持つとまでは言えていない。ここには、持続という言葉を共有しながらも、道徳論においての個の持続と全体の発展が相関する（持続が道徳論の基礎・中心である）ということ、そして、持続と現代科学が両立可能である、という二つの独立した主張がある。

本書の意義は、現代的なベルクソン哲学をめぐる科学、脳神経学といった観点からの議論が丁寧に集約され、それに対するベルクソンを支持する側からの応答が見出せる点と、著者がベルクソンの道徳論を持続を中心に据えて解釈している点の二つにある。特に科学・脳神経学のベルク

ソンに対する批判の詳細な検討は大きな価値を持っている。ただ、著者の目的が持続を中心として科学と道徳の結びつきとその意義を示すことにあるのならば、ここから、より十全な展開が必要とされるだろう。

（たなかゆうすけ　哲学哲学史・博士後期課程）